様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４５３３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２１２５

研究課題名（和文）就学前年齢に達した低出生体重児の親に対するポジティブ・ペアレンティング

研究課題名（英文）Verification of the effect of Positive Parenting Program for parents of Low Birth Weight infants in Transition to School

研究代表者
石原　あや（ISHIHARA, Aya）

兵庫医療大学・看護学部・准教授

研究者番号：２０２９０３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、就学前年齢にある低出生体重児の親を対象に、ポジティブ・ペアレンティング・プログラム（トリプルP）を実施し、その効果を検証することである。第一段階として、3～6歳の低出生体重児を育てている母親を対象に、育児に関するニーズ調査を行った。その結果および先行研究をふまえて、第二段階として育児支援セミナーの計画を立案した。現在、実施に向けての準備段階である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在、出生する新生児の10人に1人が低出生体重児である。本研究では、就学を控えた時期の低出生体重児の母親が感じている早産や低体重に起因する発達の特徴やそのことに対する不安への支援ニーズを明らかにすることができた。しかし研究期間内に、それをふまえた育児支援セミナーの実施とその評価まで至れなかった。今後、本研究を継続して行うことで、低出生体重児の親に対する子育て支援の1つの方法として貢献していける可能性があると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to verify of the effect of Positive Parenting Program(Triple P) for parents of Low Birth Weight infants in Transition to School. As a first step, we conducted a survey of the needs of mothers raising low birth weight infants aged 3-6 years old performed. Based on the results and previous research, a second step of parenting support seminars was planned. The project is currently in the preparation stage for implementation.

研究分野：小児看護学

キーワード：低出生体重児　就学前年齢　ポジティブ・ペアレンティング　養育支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

出生率が低下している中、出生体重 2500g 未満の低出生体重児は新生児の約 1 割(9.6%)を占め、この 30 年間で 2 倍に増えている（厚生労働省人口動態統計 2013)。わが国の周産期医療は救命率の向上と併せて、intact survival（後遺症なき生存）を目指して発展してきており、1980 年代以降世界のトップレベルを維持している。低出生体重児の長期予後に関する全国的な調査では、その発達状況や脳性麻痺などの神経学的障害、慢性肺疾患等の合併の頻度・程度などについて詳細な分析・報告がなされている（上谷 2008、河野 2012）。また、全国の総合周産期母子センターにおいて、極低出生体重児（出生体重 1500g 未満)を中心に、異常の早期発見、成長・発達の支援、家族への育児支援等を目的とした長期フォローアップ体制の構築・充実の取り組みが行われている（河野 2011）。その一方で、重篤な合併症がなく従来 4～5 歳で成長・発達がキャッチアップするとされてきた子どもの中に、身体発育，運動，社会，認知，言語などに発達のアンバランスさをもつ子どもや（山本 2007,増田 2004,斉藤他 1999)、学齢期になって学習障害・注意欠陥多動性障害などの発達上の問題を示す子どもが少なくないこと(三科 2006)も報告されるようになってきた。つまり、一見順調な経過を辿っている低出生体重児の中にも、幼児期から学童期にかけて発達支援のニーズをもつ子ども、子育ての困難さを感じている家族が一定数存在していることが推測される。

英国児童法(1989)では、「援助がなければ健康や発達が達成できない可能性のある子ども」のことをチルドレン・イン・ニード（要支援児）と定義している。柳川(2011)は、子ども虐待の問題は、日常の子育ての問題から最重度の死亡に至る広いスペクトラムの中でとらえる必要があり、要支援児への積極的な育児支援が結果的に虐待予防につながると述べている。「低出生体重児」は、子ども虐待の子ども側のリスク要因の代表的なものであり（子ども虐待対応の手引き 2013)、兵庫県の統計では要支援児の 43.9%と最多の割合を占めている（兵庫県養育支援ネット 2012）。つまり、低出生体重児の家族への育児支援は、子どもの健やかな成長発達を保障するとともに、虐待の発生予防にも貢献できる可能性が高いといえる。

低出生体重児の支援に関しては、1980 年代以降、子どもの成長・発達の促進、親子の愛着形成や育児支援を目的としたデベロップメンタルケアやファミリーセンタードケアなどの実践が多くの施設で行われてきた。先行研究の大半は、妊娠中や出産前後、NICU 入院中、退院時から退院直後、長いものでも退院後 1 年以内に焦点をあてたものが多い（藤野他 2011）。近年、幼児期以降の低出生体重児を対象に、子どもの発達の特徴を長期間の追跡から分析した研究（安藤他 2006,2007,2008,2009）や、母親の育児負担感(押木他 2001、佐藤他 2015)、養育態度(斉藤他 2001)等の視点から育児の実態を分析した研究、母親教室や幼児教室の試み（高谷他 2013、原野他 2013）などの報告も見られるようになっている。しかし、低出生体重児の中でも重篤な合併症等をもたない子どもまで広く「要支援児」の枠組みの中でとらえ、日常の育児に関する問題に対する支援を行いその有効性を検証した研究はほとんど見られない。

２．研究の目的

本研究の目的は、就学前年齢に達した低出生体重児の親に対して、オーストラリアで開発・評価が重ねられてきた育児支援プログラムであるポジティブ・ペアレンティングプログラム（以下トリプル P）グループセミナーを実施し、その効果の検証を行うことである。

３．研究の方法

（1）低出生体重児の成長過程の中でも、就学前年齢に達した幼児期の子どもを育てている母親に焦点をあて、現在の育児に対するニーズを明らかにするための質的調査を行う。

（2）（1）の結果をふまえて、トリプル P グループセミナーの企画を立案・実施し、その効果を検証する

４．研究成果

（1）就学前年齢の低出生体重児の母親の育児に関するニーズ調査

2017 年 11 月～2018 年 6 月に、A 病院の NICU を退院し、外来フォロー中でかつ重篤な先天性疾患や後遺症のない出生体重 1800g 未満の 3～6 歳の子どもをもつ母親 10 名を対象に、半構成的質問紙を用いた面接調査を行った。内容は、出生から現在までの育児について心配や安心した時期や内容、就学を控えた現在の思いなどである。面接で得られたデータは逐語録にし、母親の育児に対する思いに着目し質的に分析を行った。

表１　対象者の背景

母親の年齢	29～45 歳（38.0±5.5 歳）
就業の有無	あり：8 名　なし：1 名　育休中：1 名
子どもの年齢	4 歳:3 名　5 歳:5 名　6 歳：2 名
性別	男：7 名　女：3 名
在胎週数	27～33 週
出生体重	750～1338g（1062±218g）

分析の結果、10 のカテゴリー（以下≪　≫）、36 のサブカテゴリーが抽出された（表 2）。

母親の多くは、NICU からの退院後≪様々な心配や戸惑いを感じながらの育児のスタート≫を切り、その中で≪低出生体重児の発達や育児についての情報が手に入りにくいことへの困惑≫を感じていた。なかには、言葉の遅れやこだわりなどの子どもの様子から≪発達遅滞や発達障害が生じる可能性についての心配≫を有する者もいた。しかし、体格の小ささや他の子どもと比べ焦りを感じながらも、≪子どもの生命力への畏敬の念≫、≪子どもなりの成長をじっくりと見守ろうという思い≫、さらには≪子どもの成長や子育ての楽しさを感じながら生活が送れる喜び≫を感じるようになっていた。就学については、集団生活の経験や生活行動の自立などから、≪就学しても大丈夫だと思える子どもへの信頼・期待≫と同時に、≪子どもが直面するかもしれない学校生活における心配≫を抱えていた。育児は、≪家族や身近な人からの日常的なサポート≫を得ながら、低出生体重児に起因する心配事については≪助けとなった共感しあえる仲間の存在や専門職からのアドバイス≫があった。

表 2　就学前年齢の低出生体重児の母親の育児に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー
様々な心配や戸惑いを感じながらの育児のスタート	・とまどいながらの育児のスタート
	・必死な思いで育児に取り組む
	・退院後スムーズに育児に取り組めた
	・無呼吸発作や感染症の心配
低出生体重児の発達や育児についての情報が手に入りにくいことへの困惑	・参考にできる情報がないことでの困惑
	・一般的な本やインターネットの情報が子どもにあてはまらない
子どものなりの成長をじっくり見守ろうという思い	・体格の小ささ
	・子どものペースでの成長を見守ろうという気持ち
	・他の子どもと比べることでの焦りやしんどさ
	・他の子どもとの比較で発達の個人差に気づく
	・なるようにしかならないと思うようにする
子どもの生命力への畏敬の念	・子どもの生命力・たくましさを実感している
	・ここまでに育ってくれたことへの感謝
子どもの成長や子育ての楽しさを感じながら生活が送れる喜び	・体格のキャッチアップ
	・日々子どもの成長を感じられる喜び
	・子育ての楽しさを実感しながら生活を送ることが出来ている
発達遅滞や発達障害が生じる可能性についての心配	・発達遅滞や発達障害に対する心配
	・子どもの様子から発達障害の可能性を考える
	・言葉の遅れやコミュニケーションに対する心配
	・こだわりや融通の利かなさがある
就学しても大丈夫だと思える子どもへの信頼・期待	・心配だった時期を乗り越え、手が離れてきたことを実感できる
	・子どもの特性に合った保育施設を考える
	・就学に対する心配はない
子どもが直面するかもしれない学校生活における心配	・手先の不器用さ
	・学習について行けるかどうかの心配
	・新しい環境、人間関係についての心配
	・就学に向けての具体的な準備
家族や身近な人からの日常的なサポート	・全面的に祖父母の協力を得ながらの育児
	・困った時には助けてもらえるが、夫婦で育児をしている
	・祖父母には積極的な助言は求めない
	・保育園や幼稚園の先生に助けられている
	・友人や職場の人に相談している
助けとなった共感しあえる仲間の存在や専門職からのアドバイス	・NICU で知り合った親同士の交流で助けられる
	・未熟児の親同士しか分からないことがある
	・現在 NICU に入院している子どもの親に対する思い
	・専門職の的確なアドバイスに対する信頼

（2）トリプル P グループセミナーの企画・実施・効果の検証

（1）の質的調査の結果および低出生体重児の育児に関する文献検討から、低出生体重児の育児においては、早産や小さく産まれたことに起因する発達の特徴やそのことに対する保護者の不安への支援に加えて、育児に対する楽しみや自信が持てるような支援が必要であることが明らかとなった。トリプル P グループセミナーは、子どもの発達・行動について関心や何か軽度の悩みがある親に、早期に発達についてのガイダンスを提供する、とくに子どもを幼稚園や保育園、学校などに入園・入学させる前の親のための一般的な移行プログラムとして有用とされているという特徴があることから、今回の対象者に提供するプログラムとして適切なものであると確認した。

本プログラムによる先行研究を参考に、対象者、開催方法、プログラム実施前後の効果を評価のための質問紙等の作成を行い、2020 年 4 月に本研究についての倫理審査を受けた。現在、指摘事項の修正を行い委員会による承認の判定を得てから、グループセミナーの実施を行う準備をしている段階である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 石原あや、吉田まち子
２．発表標題 就学前年齢に達した低出生体重児をもつ母親の育児に対する思い
３．学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鎌田　佳奈美 (KAMATA Kanami) (30252703)	摂南大学・看護学部・教授 (34428)	
研究分担者	柳川　敏彦 (YANAGAWA Toshihiko) (80191146)	和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授 (24701)	